

春雨のように——日本文学を潤した法華経

カルロス・ルビオ

※この講演は2013年4月12日、マドリッド近郊のスペインSGI文化会館で行われたものです。スペイン語による講演を英訳し、それを講演者自身が校閲した原稿 (*The Journal of Oriental Studies* vol.23に掲載) から邦訳しました。

春を迎えたここマドリッドは、今日、予期せぬ雨の訪れがありました。まことに新鮮で、ぜいたくなまでの潤いをもたらしてくれたわけです。日本の方々であれば、「春雨」と美しく表現されることでしょう。

これから1時間少々、土と大地に恵みを与える「水」の力について話させていただきますが、よく言われるように、水はいわば「地上の生命にとっての宝」です。私は、「水」を「法華経」の譬喩のつもりで語っているのですが、仏教の信仰者にとって、この譬喩が何を意味するかななどをご説明するつもりはありません。ここにいらっしゃる多くの皆さまとは違って、私は信仰心というものに恵まれておりませんので、説明する資格がないのです。しかし、今日はあえて法華経の本質的

な価値についてお話しさせていただきます。このような大胆な試みを、どうかお許しください。

私が法華経の本質的な価値を理解したきっかけは、SGI（創価学会インタナショナル）と協力してスペイン語版の『日蓮大聖人御書全集』の監修をしたことです。その際、法華経と日本文化、特に和歌とのつながりについても学んだのです。

希望のメッセージ…「あなたも仏に成れる」

法華経の最初の場面では、多くの阿羅漢や修行者、諸天、王らが仏の教えを聞きに集まります。そして、彼らが仏に大いなる礼拝と供養を捧げた後、仏はそれらを納受し、深い瞑想に入ります。たくさんのお衆生が仏の説法を待っていると、花が雨のように空から降り注ぎ、大地が震動します。やがて仏の眉間の白毫びやうごうから光が放たれ、幾万の世界を照らし出します。弥勒菩薩はこの不可思議な現象の意味を知ろうとして、文殊師利菩薩に尋ねます。文殊は、過去の諸仏のもとでの体験を振り返り、この現象はずっと昔に仏が無量義経

を説いて三昧に入られた時に起こったことと同じだと語ります。大地が揺れ、空から花が降ってきたのは、かつて仏が法華経を説かれる前に起こったことだから、今まさに仏はまた法華経を説法されるに違いありません。それを聞いて大衆の期待が高まるなか、法華経の序品は終わります。

次の第2章（方便品）では、三昧に入っていた仏がいよいよ立ち上がり、仏ではない者に仏の智慧を教える難しさを語ります。菩薩でさえも仏の智慧を理解することは到底できないと言います。そこで聴衆を代表して舍利弗が仏に眞の法を説くように嘆願し、やっと仏は仏の智慧を説くことに応じます。しかし、仏の最高の智慧を理解する難しさを聞いた者たちの一部は、その場から立ち去ってしまいます（五千の上慢）。そして仏は「ここに残っている者は、やがて仏になるであろう」と称賛するのです。

こういうわけで、法華経第3章（譬喩品）は舍利弗が「踊躍歡喜ゆやく」する姿から始まるのです。こうして説法は、法華経の多くの譬喩（法華七譬など）のうちのひとつ（三

車火宅の譬え」に入ります。

法華経の後半には、法華経を受持する者が受ける素晴らしい功德が挙げられており、法華経をどのように書写し、読誦し、弘め、解説するべきであるかなど法華経をたもつ者の責任についても記されています。こうして、法華経そのものが「信仰の対象」へと昇格されていきます。

しかし、法華経への讃嘆は詳細にわたって、どんどん増えていきますが、大衆が列座する中、仏の悟りの内容は一向に説かれません。法華経には、あふれんばかりの功德が説かれ、目もくらむイメージと荘嚴な詩的言辞にあふれています。しかし、ジョージ・タナベが著書『日本文化における法華経』⁽¹⁾で言うように、法華経は「本文が無い本の長い序文」に似ているのです。つまり、法華経の称賛の対象は法華経そのものなのです。

もちろん、実際には、法華経は基本的思想として、一切衆生に仏性があり、ゆえに誰もが仏に成り得るという希望と喜びのメッセージを発しています。

日本文化に「生命の水」を与えた法華経

信仰のない学者の立場からすると、法華経の登場人物たちが、全く説法されない教えを讃嘆し続けるといった光景は、他に類を見ない特徴に思えます。一方、法華経は、さまざまな方法で読まれ、聴かれ、手を加えたり応用されたりしてきました。つまり、この空っぽの経典は、それにもかかわらず、信仰や儀式のための絵画となったり、詩として朗読されたり、石に彫刻されたり、権力を得るため、人々の病気を癒すため、名誉を勝ち取るため、芸術家に靈感を与えるために使われてきました。法華経は書物として、また讃歌として、幾世紀にもわたって日本文化に多大な影響を与えてきたのです。

法華経は、定まった形をもたない液体のように、容器の形に応じて変化する不思議な性質をもっており、「水」に譬えられます。水は、容器が無ければ、こぼれ、地面などに落ちてしまいます。しかし、形は無くなっても、その性質は地に移されるのです。そして水はや

がて地に行き渡って、そこに生命を与え、価値を与えます。法華経も日本文化において、このような役割を担ってきたのです。

法華経は、他の経典と同じように、さまざまに解釈され、さまざまな書物で言及されてきました。しかし、その肝心の部分は空っぽなのです。ですから法華経は特別な存在なのです。そのテキストたるや、肝心の部分の周辺をぐるぐる回っているかのような文の運びであるために、何が書かれているのか解釈しにくくなる。とともに、言葉にされていない部分を何かで埋めたくなるのです。そうした傾向があるために、法華経は、その経文を自由に変形されながら、日本文化のさまざまな局面に応用され、生命を与えてきたのでしょうか。譬えるならば、お香の香りが部屋の隅々や家具にまで染み込んで、その部屋に独特の趣きを与えるようなものです。本講演の目的は、この香りに皆さまをお招きすることです。また、水の譬喩で言うならば、命を与える法華経の水が浸透したこの大地を、皆さまと一緒に認識することです。

しかし、日本文化といっても、大地が巨大であるように、絵画、歴史、哲学、政治、宗教、彫刻、書道、料理、建築など、その範囲は広大です。これらすべてについては、とても1時間では語り尽くせませんが、第一、その用意ありませんので、やめておきますが、今日はその中のほんの一部の範囲、命を与える法華経の水が素晴らしく染み通り、並外れて美しく興味深い草木を育てた土地について話させていただきます。この土地というのは日本文学のエリアであり、その中に和歌の領域もあります。

日本文学は、1500年という非常に長い年月をかけて発展してきましたので、今回は特に7世紀から13世紀の和歌に絞ってお話したいと思います。この時代に、日本の美意識や文芸の洗練の基準が形成されました。他方、仏教の影響が貴族階級や高僧の間に浸透し始めた時代でもあります。彼らは当時の唯一の知識階級でした。

今回は、ジャンルも時代も異なる多様な事例を紹介しますが、それは法華経が日本文化に与えた影響の多

様性を知っていただきたいからです。

例えば――。

- 1) 歴史として語られた『古事記』の神話について。
- 2) 日本古典文学の最高傑作とされる『源氏物語』について。

この両作品については、池田大作SGI会長と歴史家・根本誠氏との対談『古典を語る』⁽²⁾で概要が述べられていますので、参照したいと思います。1970年



ルビオ教授が翻訳・編集した対訳詞華集『鳥と花：日本詩歌の千五百年』。174の作品を多くの挿絵入りで収録している

代の発刊で、英訳などはありませんが、スペイン語訳はまだありません。

- 3) 和歌について。
勅撰和歌集や選子内親王、西行、慈円らの私家集に
ちりばめられている作品をめぐって。

私は（スペイン語と日本語との）対訳詞華集『鳥と花』日本詩歌の千五百年⁽³⁾を編みましたが、その中の和歌を紹介します。また先述した『日本文化における法華

経』に収録されている山田昭全氏の論文「詩歌とその意味・中世詩歌と法華経」⁽⁴⁾の中から、いくつか拾い集めてみました。

1 古事記——日本文学の苗床^{なえどこ}

「日本の古代の事がらを記録したもの」という意味の「古事記」は、まるで神話と歴史の間に架けられた「霧の橋」の上にしつかり固定されたかのような作品です。そこには日本文化の始まりを告げる、ダイナミックで多彩な神々や英雄の姿が生き生きと描かれています。

す。半ば伝説的な物語、天地開闢かいびやくの神話、歌謡、詩歌、王統譜——それらの混淆のようなこの作品は、今日では歴史書というよりも、その文芸としての価値や人類学的な価値が認められています。

また、古事記は712年3月に朝廷に献上されましたが、古事記に出てくる歌謡や伝説の多くは、もっと早い段階、つまり7世紀以前の、日本社会で読み書きが広まっていなかった時代にできたものでしょう。

また古事記は、天武天皇の治世であった7世紀最後の25年間に編纂が進められましたが、これはちょうど仏教が国家に積極的に取り入れられた時期と重なります。さて、仏教が西方の韓・朝鮮半島や中国から伝わり、日本の朝廷によって公的に受け入れられたのは6世紀の半ばだということを、ここで確認しておきたいと思えます。それより数十年も前に、中国からだけでなくインドや南方のルートで日本に伝えられたとも考えられています。

古事記の原形は、仏教経典が知られ、重視されるようになった7世紀には、朝廷に存在していたようです。

例えば、後の時代に観音菩薩の化身として崇められた聖徳太子（574・622年）が、法華経の熱心な信仰者であったのは周知のことです。有名な摂政であった聖徳太子は、法華経と他のふたつの経（勝鬘経・維摩経）への注釈をまとめた「三経義疏」を著しました。今日では本人による著作かどうかは疑われていますが——。法華経は、多くの人に理解されるよう、譬え話が使われていたり、やさしい言葉で表現されていたため、当時の中国でとても人気がありました。そのために聖徳太子も法華経を重視していたようです。

しかし、仏教を国教にまで引き上げたのは、国分寺を全国に造った聖武天皇（在位724・749年）でした。聖武天皇はさらに国分尼寺でも法華経が読誦されるよう勅令を出しています。法華経のどの章にも罪の消滅について詳論されてはいませんが、これらの国分尼寺は法華滅罪之寺と呼ばれました。法華経は、金光明経・仁王般若経とともに護国三部経のひとつとされました。

古事記の中の法華経

これらの歴史的事実をご紹介したのは、古事記が編纂されていた7世紀の終わりには、法華経は朝廷で知れ渡っており、古事記がまとめられたのは8世紀であることを確認しておくためです。日本の学者・神田秀夫氏は、仏教経典なканずく法華経や維摩経が、文辞・文体の上で、古事記を編纂した太安万侶に多大な影響を与えていたことを論証しました。池田SGI会長の対談『古典を語る』で紹介されている神田氏の論点の幾つかを紹介します。

a) 古事記の最も特徴的な点のひとつは、多くの古代歌謡が巧みに織り込まれていることである。それは仏をほめたたえるために使われた古典の「偈」を模倣したものと考えられる。偈は教義の要点を覚えやすくするために使われた。

b) 古事記の神話や伝説に登場する人物が神々や天皇に何かを申し上げたという時には、「白」という表現が使われているが、これも漢訳仏典から

きたものと考えられる。例えば法華経の寿命品には、「弥勒菩薩等は俱に仏に白して言さく」とあります。(俱白仏言) こうした敬語的「白」の用法は、日本において5世紀から知られていた儒教の経典の中ではほとんど見ることはない。

c) 古事記には歌謡や場所、人、神などの固有名詞を表記する際に、一字一意の漢字ではなく一音節一字という、いわゆる音仮名が用いられている。この用法は、中国において中国語にはないものを翻訳する際に使用され、鳩摩羅什(344・413年、別説も)も、法華経漢訳の際などにこの音訳を用いた。例えば、法華経の陀羅尼品には「咒」を音訳した例がある。

——このような漢字の音訳は、阿羅漢・羅漢、阿修羅、波羅蜜、優婆塞、娑婆というように、サンسكريット語やパーリ語、その他のインドの言語を漢訳する際、儒教のような仏典以外の中国古典にはない語を訳す場合に用いられています。古事記の中でも、7世紀の日本で使われていた言葉を表記する際に、法華経の

中で使われていたような音仮名が用いられているのです。

d) 古事記の神代篇には、出雲の伊那佐の小浜（現在の島根県出雲市・稲佐の浜）に降り立った天照大神の使い（建御雷）によつて、大国主の国土が無理やり取り上げられようとする場面がある。「出雲国の伊那佐の小浜に降り到りて、十掬劍を抜き、逆に浪の穂に刺し立て、其の劍の前に踏み坐して⁽⁶⁾」。この「踏み坐して」とは脚を組んで坐つた格好である「跌坐」を指しており、法華經の中で、仏が瞑想に入つた時の姿である「結跏趺坐」から来ていると考えられる。

e) 古事記の「成神」（神道の神に成る）という言葉は、法華經で使われる「成仏」から来ていると考えられる。このように法華經から借りられてきた言葉は、他にも「歡喜」「貧窮」「嫉妬」「遊行」などがある。

さて、古事記を日本の美的・文化的価値の苗床であ

ると見なすとしたら、古事記への法華經の影響は、「水」が強い勢いで大地に浸透するように、次代の文化的表現の中にも広がっていったでしょうか？

2 源氏物語

「光る君」を描いた古典小説

次に、多くの人々によつて日本の古典文学の中で特に重要と見なされている作品への法華經の影響に着目してみます。紫式部という高貴な女性によつて書かれた「源氏物語」です。（最新の英訳版で）1200頁にもなる名作で、54帖に分けられています。1001年から1006年の間に著されたとされるこの作品は、世界のフィクションの中でも最重要の作品のひとつと言つてよいでしょう。

主人公・光源氏は美徳と芸術的技能を備えた人物とされており、物語では光源氏の多面的な姿が描かれています。ひとつは恋人あるいは日本版ドン・ファンとしての光源氏、2つ目は政治家・権勢人としての光源氏、3つ目が宗教人としての光源氏です。そして源

氏物語のテーマは「人生の無常」と「避けられない死」のふたつでしょう。

では、法華経はこの傑作にどの程度、影響を与えたのでしょうか。源氏物語が書かれた頃の平安仏教では天台と真言というふたつの宗派に権威がありました。源氏物語では怨霊や、危篤の人のための加持祈祷について記されていますが、これらは真言宗の信仰などと深く関連しています。さらに、阿弥陀仏の極楽浄土への信仰についての事例がたくさんあります。

法華経を熟知していた紫式部

『古典を語る』の中で、池田会長は国文学者である池田亀鑑氏の本、特に『源氏物語事典』等を引いて、源氏物語への法華経の影響について言及されており、幾つか紹介します。

a) 主人公・光源氏の名前は、美しい人や神聖な人の体から放たれる光という意味で、その姿は仏典に描かれる仏の姿を連想させる。また、もうひとりの主要人物である薫についても同様で、

薫の名は香りを意味しており、体から光ではなく芳香を放つとされている。これは法華経第23章の薬王品に出てくる牛頭栴檀ごずせんたんの香りを連想させる。ここでは牛頭栴檀の香りは、真の信仰者から放たれるものとされている。⁽⁸⁾

b) 源氏物語第19帖「薄雲」では、藤壺中宮(光源氏の父・桐壺帝の後妻。源氏の初恋の相手)の死について次のように述べられている。「ともし火などの消え入るやうにて、はて給ひぬれば……」⁽⁹⁾。これは、法華経の序品に出てくる「如薪尽火滅(新)」⁽¹⁰⁾の言葉がもとになっていると考えられる。

c) 第47帖は「総角あけまき」と呼ばれ、ここでは法華経第20章に登場する常不軽菩薩について書かれている。

d) 第53帖の「手習てならひ」では、横川僧都よかわのそうずと呼ばれる僧侶が、身元のわからない若い娘・浮舟うきふねのことを話す。「お中人いなかの女もむすめ、さる様したるこそは侍らはべめ。龍の中より、仏生まれ給はずばこそ、侍らめ。

たゞ人にては、いと、罪軽きさまの人になむ、侍りける」⁽¹⁾。この一文は、法華経第12章・提婆品に登場する龍王の娘・龍女が、生まれが卑しい者とされながら仏の境涯を開くという有名な故事を下敷きにしたものであろう。

e) 源氏物語の注釈書である15世紀の一条兼良の著作「花鳥余情」、17世紀の北村季吟の著作「湖月抄」には、仏典が与えた源氏物語への影響について考察されている。第2帖「帚木」での「雨夜の品定め」で、光源氏と友人が女性たちの品評をしている場面と、法華経の「三周の説法」との類似性については当時からわかっていたように、広く知られている。

——「三周の説法」とは何でしょうか。法華経第2章「方便品」には、世間の諸々の現象がすべてそのまま永遠の真理を表していることを示す「諸法実相」が釈尊によって説かれ、舍利弗だけがその妙理を会得したとされています。この説法は法説周と呼ばれます。次に、法華経第3章で「三車火宅の譬え」を説き、須

菩提、迦旃延、迦葉、目連という弟子たちがこれを聞いて悟ります。この説法を譬説周と言います。三番目に、より理解力に乏しく、譬説周でも理解できなかった富楼那たちのために、釈尊は化導の因縁の相を示し、仏の過去世の話をします。これは因縁(説)周と呼ばれます。

源氏物語の第2帖では、女性的一般論から始まって、その後、想像上の女性の描写へ進んでいきます。これが法華経の法説周と譬説周に相当するものと考えられます。最後に、友人たちが女性との個人的な体験について語るのには、仏が過去世の話をするのに相当すると見られているのです。

f) 仏法は、生老病死という人生の根本的事実を直視するところから始まり、さまざまな観点からその課題に取り組んでいる。また、生老病死の実相を説明しようとし、苦しみを乗り越えるための幾つかの方法を説き、避けられない現実問題から人々を救い出そうとしている。つまり、仏法は生命の真の姿とは何かを明かしている。

天台宗の一念三千という生命の法理は、法華經に説かれた仏教思想の結晶である。

文学というものは、人間が日常生活で直面する人生の実相を説明しようとする試みでもある。十界論で言えば、文学の試みとは、九界の境涯にある人間を成長させて、より高い境涯、すなわち仏界へと導こうとする試みである。唯識論で言えば、六識や七識から九識の自覚へと進ませようという試みなのである。

——対談では、源氏物語の哲学として筆者の文学観が述べられている「螢」の章（第25帖）からも引かれています。こうあります。

「よき様に言ふとは、よきことの限りえり出で、人に従はむとは、又、あしきさまの、めづらしき事を取りあつめたる、みな、かたぐいにつけたる、この世のほかのことならずかし……ひたぶるに、空言といひはてむも、事の心、違ひてなむありける。仏の、いと、うるはしき心にて、説きおき給へる御法も、方便といふ事ありて、さとりなき者は、こゝ

かしこ、たがふ疑ひを、おきつべくなん。方等經の中におほかれど、いひもてゆけば、一つ旨にあたりて、菩提と煩惱との隔たりなむ、この、人のよしあしきばかりの事は、かはりける。よく言へば、すべて何事も、むなしからずなりぬや」⁽¹²⁾

このように作者は、法華經を熟知していたことがわかります。

「枕草子」の中の法華經

源氏物語と同じ頃に女性によって書かれたもので、はっきりと法華經に言及している作品はもちろん他にもあります。それは清少納言の「枕草子」です。光彩を放つエピソードの数々が集められたこの隨筆集の中に、ひときわ目立った一節があります（「小白河といふ所は」の章）。そこに描かれている女性（作者）は、説法を聞いている途中で帰らなければならなくなり、牛車を呼ぶのです。すると、ある貴族が彼女に「やや、まかりぬるもよし」⁽¹³⁾（まあ、退出するのでもまたよいでしょう）と言います。これは、法華經の中で、五千人の上慢の者

が仏の説法を聞きたがらず、その場から立ち去るという話に関連づけられます⁽¹⁴⁾。この話は、10世紀から11世紀の日本の朝廷内ではよく知られていたのでしょうか。当時の屏風の画にも描かれていたことから、このことは確認できます。

ちなみに、貴族が集った法華八講の中で最も人気のあったのは提婆達多品で、そこには、ある王が（仏の悟りを求めて）阿私仙人^{あしせん}に仕え、薪を拾い、水を汲んで修行したと説かれています⁽¹⁵⁾。

3 聖なる力に浸された「和歌の花園」

古事記と源氏物語に続いて、日本文学への法華経の影響の第3の旅は、庭園を歩いていく旅です。その光と影の庭には石があり砂があり、苔がむし、花が咲き、いつも絶妙なる美しさをたたえています。この庭とは、日本詩歌の園です。

「歌」が人と社会を動かす力をもっていた

日本文化の伝統における和歌の意味は、西洋の詩歌

とどこが異なるのでしょうか。私は、日本のように詩歌を大切にしている文化は珍しいと思うのです。それにはさまざまな理由があります。例えば、日本文化の夜明けの時代から、和歌には言霊^{ことだま}の聖なる価値が込められていました。また、平安時代の宮廷では、近い交際は和歌を詠むことによって行われたため、重要な社会的役割を果たしました。和歌を詠み、和歌を解する能力は、宮廷で昇進するために不可欠だったので。これほど詩歌が権威あるたしなみとして社会に行き渡っている状況は、西洋ではまずありません。

日本ではこの数世紀前から、中国の唐王朝における漢詩の役割と同様の地位を和歌に与えてきました。違いはもちろんありますが、現代でいえば、新聞や出版、テレビの役割に通じます。つまり、世論をつくるものであり、勅令とともに最も強い力をもつ表現手段だったのです。

和歌には、たくさん有利な点がありました。例えば、和歌には品格があるため、宮廷内のコミュニケーション、また公的な行事にも用いられました。さらに、和

歌は芸術ですから、他の方法だと奇矯に思われる考えでも表現できました。暗示的な表現ですから、検閲の厳しさから逃れることもできました。

そして、和歌は人間の最も深い感情を伝え得るものであり、愛情や信仰心を表す大切な手立てでした。そして、ここにこそ、仏典の女王たる法華経の魂と思想とイメージが染み通った和歌の数々が詠まれたゆえんがあります。

日本の島根——かつて出雲と呼ばれていた地です——ここのある神社に、「和歌発祥の地」であることを示す碑が建てられています。⁽¹⁶⁾ 言い伝えによれば、歌の作者は須佐之男命すさのおのみことという神だそうです。この神聖な和歌は、5・6世紀頃のものが文字化されて、7世紀に編纂が進められた古事記に収録されたのかもしれない。

「最初の和歌が神によって作られた」という信仰は、日本の文化に大きく影響しました。例えば、日本では、天皇は神の血筋を引いていると伝統的に信じられていましたから、この信仰によって、和歌のために天皇が

絶え間なく支援をすることは当然とされたのです。最初の和歌が（古事記に）編入される頃も、その前後の時代も、和歌には神の超自然的な力が宿っていると広く信じられていました。6世紀頃から、仏教思想が日本に徐々に入ってくるようになると、それ以前からの古い習わしに従って、神への祈りが和歌のかたちになるとともに、法華経の信者も和歌を使って法華経をほめたたえ、自身の信仰を強めていったのは自然なことでした。たくさんの方が和歌を詠み、それを神社の柱に供えたり、仏教詩歌（釈教歌）集に収めたりしました。

10世紀の初めに紀貫之は、「古今和歌集」の有名な序文「仮名序」を執筆しましたが、これは日本初の和歌論です。貫之は、和歌について「ちからをいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬ鬼神をも、あはれとおもはせ」⁽¹⁷⁾（力をも入れずに天地を動かし、目に見えない霊界の鬼神をも感動させ）と述べています。ちなみに、能は一種の宗教的典礼劇であり、15世紀頃に栄え、今でも演じられ続けていますが、その多くの作品に同様の思想があります。

勅撰和歌集における釈教歌・法華経歌(1086～1439年)

勅撰集	成立時期	釈教歌数	法華経歌数	法華経歌の比率
後拾遺	1086	19	8	42.1%
千載	1188	54	35	64.8%
新古今	1206	63	38	60.3%
新勅撰	1234頃	56	33	58.9%
続後撰	1251	52	28	53.8%
続古今	1265	73	38	52.1%
続拾遺	1278頃	66	43	65.2%
新後撰	1303	106	56	52.8%
玉葉	1313-1314	110	51	46.4%
続千載	1320頃	106	46	43.4%
続後拾遺	1325-1326	42	21	50.0%
風雅	1344-1346	63	34	54.0%
新千載	1359	118	41	34.7%
新拾遺	1364	78	33	42.3%
新後拾遺	1383	35	19	54.3%
新続古今	1439	66	29	43.9%
合計		1107	553	50.0%

勅撰和歌集における「法華経歌」の伝統

また、次の表(注4・山田論文より)で勅撰和歌集の長いリストを見ますと、釈教歌は少なくありません。なかんずく法華経歌は目立って多いことがわかります。

全般的に言うると、日本の釈教歌は、以下の3種類に分類できます。

- a) 経旨歌(きょうし)・経典をもとにした詩歌
- b) 法縁歌・儀式と礼拝についての詩歌
- c) 雑歌・その他の多様な釈教歌

こうした3種類の詩歌は、中国にも存在します。中国でも仏教が知られるようになった初期の頃から、信仰の表現方法として熱心に詩をつくったわけですが、この文化が日本にもあるのです。

初めの経旨歌は、経典をもとにしており、経典の一文がその詩歌の題として使われています。次の法縁歌は、法華八講、涅槃講、落慶・開眼法要、葬儀などの儀式で使用されます。最後の雑歌は、仏教の思想や行為に関連した詩歌が主で、観音賛仰や高野参詣などについての詩歌があります。

最初の経旨歌は、釈教歌の中核部分ですが、その中心部に一連の「法華経歌」があります。要するに、仏教の核心は法華経であり、釈教歌はその核心から生まれ出たものなのです。

さて、日本詩歌における法華経を探る私たちの旅は、3つの時代を通ることになります。

- A) 7・8世紀、あるいは奈良時代
- B) 9・12世紀、あるいは平安時代
- C) 12世紀後半・13世紀、あるいは鎌倉時代前半

A) 7・8世紀、あるいは奈良時代

「万葉集」は、日本文学の中でも最も興味深い詩歌集のひとつで、中国思想や仏教思想の影響が比較的少ない7・8世紀頃の詩歌が編纂されています。ところが、万葉集の第3巻には、法華経についての和歌があります。次の和歌は市原王によって詠まれたものです。

いなだき きみす
頂に蔵める玉は二つ無しかにもかくにも君がまに
まに (万葉3・412)

たもとりの
(髻の中に秘めた宝珠はふたつとない、かけがえなき宝です。そうではありますが、ともかくも、あなただの思うがままになさってください)

このまぎれもない恋愛歌は、法華経安楽行品をもとにしています。安楽行品の中には、転輪聖王が戦功のあった兵士に、さまざまな褒美ほうびを与えたものの、自分の髻の中に秘蔵する宝珠だけは与えようとしなかったという物語(髻中明珠の譬え)が述べられています。

宗教的観点からは、万葉集の中に法華経をもとにした和歌が幾つかあると断定することはできません。万葉集第16巻の中には、法華経をもとにしたとも思える2首があります。⁽¹⁸⁾これらは、河原寺の仏堂の裏の「倭琴」⁽¹⁹⁾の面に書いてあったと注記されているのですが、2首は実は法華経ではなく、他の経典をもとにしています。

この時代の僧・行基(668・749年)が詠んだとされる歌があり、ずつと後に「拾遺集」(1005・1011年)と呼ばれる和歌集に納められています。間違いなく法華経の提婆達多品の内容にもとづいています。

法華経を我が得しことは薪たきぎこり菜つみ水くみ
つかへてぞ得し(拾遺1346)

これは釈尊の過去世の話にもとづいています。王でありながら自らの王国を捨て、阿私仙人の使用人として仕えたという説話で、この和歌にあるような雑事をしながら法華経を学んだというのです。

B) 9・12世紀、あるいは平安時代

この3世紀間において、澄み渡った夜空に輝く月のような存在が、女性歌人・選子内親王⁽²⁰⁾(964・1035年)です。選子内親王は、最初の釈教歌集と考えられている「発心和歌集」(1012年)を編纂しました。彼女は賀茂斎院(賀茂神社の斎王)でありながら、信心深い仏教徒でもありました。そこに何の矛盾もなかったのです! 発心和歌集の序文を読むと、彼女は仏典を讚美するのに和歌が大変効果的であることを知っていました。彼女は日本で生まれ育ち、中国語もサンスクリット語も知りませんでした。そこで、31音節から成る和歌を通して、仏と菩薩を讚嘆することにしたのです。

和歌と漢詩という「ふたつの世界」

それでは、その頃の女性は、皇女たちも含めて、読み書きができたのでしょうか。これから当時の日本社会の読み書きについてお話ししたいのですが、それを知れば、日本の仏教詩歌への女性たちのたぐいまれなる貢献に、私たちはより感謝することになるでしょう。

「和歌」と「漢詩」という言葉は、選子内親王という優れた女性が生きた社会がどんなものであったか、その扉を開いてくれます。和歌は仮名^{かな}、つまり一文字が一音をもつ音節文字で書かれています。漢詩はすべて漢字で書かれています。和歌も漢詩も両方、日本の詩歌です。このふたつには、これ以外の違いもあります。例えば、和歌は感覚や感情などを表現することが多い一方で、漢詩は一般的に風景や中国の故事などをたたえる内容がほとんどです。漢詩と和歌は、社会的に對極にある、ふたつの現実を体現していたのです。すなわち、漢詩は男性の領域であるとされていて、漢文や漢詩を学ぶことは男性にしか許されませんでした。一

方、和歌は大部分が抒情詩で、情感的な内容であり、女性のものであると考えられていました。女性たちは、日本古来の口承文学の相続人であり、彼女たちによって、それは次代にも受け渡されていったのです。それにしても、漢文を習うことを許されない以上、彼女たちが、ほかにどんなかたちで自分たちの思いを詩歌として吐き出せたことでしょうか？

さて、女性たちが発展させた書体あるいは文字は「女手^{おんなで}」として知られています。女手は、複雑な漢字を簡略化してできた一定数の仮名を書くものです。仮名というこの音節文字表記は、現代では「ひらがな（平仮名）」と呼ばれており、日本の子どもたちは読み書きを学ぶ際、まずこれを学びます。「女手」という流麗な線で書かれた仮名は、より私的なもので、宮廷の女性たちが自分たちの感情を散文や歌の中に表すには適していたのかもしれない。

漢字と仮名の分離はとても厳しいものでした。選子内親王が生まれた10世紀には、貴族の男性たちは、女性らしい仮名や心情的な和歌を書くこと、自らの威厳を

失うとされていたのです。そこで、10世紀の初めに活躍していた廷臣であり詩人であった紀貫之は、社会的立場を損ねないよう、女性になりすまして、散文の中に和歌を挿入した「土佐日記」（935年頃に成立）と呼ばれる作品を、ほとんど仮名で書いています。このように、和歌という日本の詩は——選子内親王も法華經を讚美するためにこの形式をとったわけですが——日本の貴族女性たちが難しい漢字を読むことが許されなかったおかげで発展したのです。和歌はまた、続く2世紀の間、主に散文で書かれた輝かしい「女房文学」においても重要な表現手段となりました。そのひとつが、先に法華經の影響を考察した「源氏物語」です。

現代日本の評論家の何人かは、女房文学には、その時代の男性の生気がなく退屈な博識に対する、手ごわい女性たちからの嘲りが込められていると述べています。当時の男性詩人たちは、ほとんど誰も見たことのない遠く離れた中国の風景や人物を題材にしていました。李白の詩や、（唐詩選など）中国の詞華集などを研究しては、自身の漢文体を誇り、遠く離れた中国の巨匠

に忠実であることを自慢にしていました。彼らにとつての最高の称賛は、中国の巨匠たちと比べられることでした。自らも中国風の名前で名乗ったり、尊敬する遠く離れた中国の巨匠たちと夢で交流することに幸せを感じていたのです。

さらに、そこには私利もからんでいました。中国に関する豊富な知識によって、高い地位の官職に就くことができたのです。後に失脚した菅原道真がその例です。また、勅撰集の選者に任命されるという栄誉もありました。先ほど触れた紀貫之がその例です。こうした利得ほど、女性が和歌を詠む理由からかけ離れた目的はありません。そもそも、知識・博学による昇進や出世は女性にとって不可能だったのですから。女性であることから、公的な教育を受けることもできなかったのです。

しかし、女性には自分の母語で書くことができるという強みもありました。その言葉をふだん使って話したり、感じたりしている言葉であつたからこそ、こまやかな情感を表すことができたのです。

法華経28品を一首ずつ詠む

選子内親王は、日本で最初に経旨歌集を完成させました。その「発心和歌集」には、さまざまな經典の法文から題をとつた55首が含まれています。そのうちの31首は法華経について詠まれており、そのうちの28首は法華経の各品について一首ずつ詠んだものであり、さらに開経である無量義経と結経である普賢経について、それぞれ一首ずつあります。加えて、歌集の末尾に化城喻品の「願以此功德 普及於一切（願わくは此の功德を以て あまね 普く一切に及ぼし）」云云の一節にもとづく和歌一首が添えられています。法華経に關係した和歌は、この和歌集の半分以上に及ぶことから、法華経を最高の経として根本經典にしている天台宗の影響を深く受けていることがわかります。

経旨歌の発展において、選子内親王の和歌集が重要であつたことは事実ですが、宮廷での法華経の影響については、興味深い先例があります。「本朝文粹」もんすい巻第11の一節では、「讚法華経二十八品和歌序」に触れてい



本講演のほか、ルビオ教授（壇上左）は2012年の「法華経——平和と共生のメッセージ」展（マドリッド展）の開催記念講演「法華経：その思想と価値」を行った（2月17日、スペインSGI文化会館／「東洋学術研究」51巻2号に掲載）。博士は応用言語学の専門家で、日本の文学・宗教史にもくわしく、『新スペイン語辞典』（研究社）等を手がけ、スペイン語版『日蓮大聖人御書全集』の監修も務めた

ます。それによると、1001年に藤原詮子⁽²¹⁾が亡くなった時、その弟であり、最高権力者であった藤原道長が、藤原行成、源俊賢、藤原公任などの詩人を招き、法華経の各品を題とする和歌を創作させたと書かれています。

法華経についての詩歌は、それまでも行基や憎正遍昭（遍照）といった他の歌人も作っていましたが、私たちの知る限りでは、彼らが法華経各品から題をとって一首ずつ詠んだという例はありません。藤原道長が集めた歌人たちも、こういうことをするのは自分たちが初めてだと意識していたと思います。

この企ての約10年後、選子内親王は歌集をまとめたわけですが、自分は女性なので和歌によって法華経を讃嘆することを決意したと書いています。藤原道長やその歌人たちは、男性として当然、漢文を知っているわけですが、それにもかかわらず漢詩ではなく和歌を作った理由は、それを捧げる相手が藤原詮子という女性だったからかもしれません。この事実はふたつのことを示しています。ひとつは、10世紀頃の朝廷におい

て、男性の間でも和歌が人気であったこと。もうひとつは、当時の朝廷で、法華経がよく知られており、広く普及していたことです。

この時代の朝廷での経旨歌の人気を測るもうひとつの要素として、10世紀から15世紀の日本の詩歌史を定期的に彩る一連の勅撰和歌集があります。天皇の支援を受けたため、ほとんどいつも権威のあった詩歌集があります。「後拾遺集」⁽²²⁾は、1086年の成立で、釈教歌として分類し収めた最初の勅撰和歌集です。それでも釈教歌だけで一巻を立てているわけではありません。

釈教歌が一巻として収められるようになったのは、1188年の「千載集」⁽²³⁾の時です。千載集の第19巻の44首は釈教歌と呼ばれ、第20巻の中の33首以上の和歌が、神道の和歌「神祇歌」と呼ばれました。このことは、当時、釈教歌がすでに高く評価されていたことを示しています。以来、千載集の後に編纂されたすべての勅撰集には、釈教歌のみを収めた一巻が含まれるようになります。このように、文学と仏教のつながりは、三十一文字の和歌によって発展したのです。

結論として言えるのは、このように釈教歌は勅撰集において何世紀にもわたる伝統になったということです。

それでは、私撰集（家集）つまり個人歌集はどうでしょうか。平安時代と鎌倉時代の代表的歌人たちは、釈教歌を自身の歌集に収めるのが通例でした。

例えば、源平合戦以前に摂政・関白・太政大臣であった藤原忠通（1097・1164年）は、「忠通集」の中に法華経の各品ごとの歌を収めました。それは宮廷の人々の手引とするためであり、もっと言えば、朝廷の最も中心部の人々に教えるためでした。彼の養女である藤原呈子（九条院）が近衛天皇の中宮となっていたのです。

C) 12世紀後半・13世紀

あるいは鎌倉時代前半

12世紀の終わり、後白河法皇が「梁塵秘抄」と呼ばれる歌謡集を編纂したことは有名です。梁塵秘抄には仏教関係の220の法文歌があり、そのうち114首

○法華經法師品に関する和歌

〔妙法華經の乃至一偈一句を聞いて〕一念も随喜せば、
我れは亦た与めに阿耨多羅三藐三菩提の記を
授く⁽²⁴⁾〕

夏草の一葉にすぎるしら露も花のうへにはたまら
ざりけり

(法花經廿八品のうち「法師品」)

この時代を代表する歌人として、西行、慈円そして藤原俊成を取り上げます。

a) 西行(1118・1190年)

西行の歌集である「閑書集」^{きんがく}には、法華經の各品に
関する和歌が順に収められています。これとは別に化
城喻品と觀世音菩薩普門品についての和歌もあるので、
合計で30首の法華經歌が収められています。彼の釈教
歌の特徴のひとつは、明らかに謎めいたほのめかしで
す。つまり、もとの仏典を知っていなければ理解でき
ないのです。

例えば――。

一体、この法華經の一節と和歌とはどのような関係
にあるのでしょうか。この和歌がいうように、なぜ露
は花の上には溜まらないのでしょうか。作者は大日經
の注釈書である「大日經疏」の観点からこの和歌を詠
んでいます。

大日經疏は中国の僧・一行(683・727)が(師で
ある善無畏三蔵の講義を)まとめたものであり、真言宗を
立てた空海がその注釈書の中で「条件付きの授記(成仏
への予言・保証)」と「無条件の授記」について書いてい
ます。

ここでいう「花」は明らかに法華経を指しています。「露」は無常つまり生命のはかなさを表す、よく知られた表象でした。花の上に露が溜まらないというのは、法華経の授記が完全な「無条件の授記」であるという意味です。つまり法華経という花は完璧になめらかな花弁をもっているゆえに、「無常」や「気まぐれで不完全な授記」を表す露は、夏草の上とは違って、法華経の花の上からこぼれおちてしまい、溜まることはできないのです。

○観世音菩薩普門品に関する和歌

「(慧日みづひは諸の暗やみを破し)能く災いの風火ふうかを伏ふくして 普あまねく明らかに世間を照らす」⁽²⁵⁾

深き根の底にこもれる花ありと言ひひらかずば
知らでやままし

〔法華経廿八品〕のうち「普門品」の二

この和歌は、空海の「法華経開題」をもとにしています。その中で空海は、妙法蓮華とは、観音として

知られる観自在菩薩の秘密の名前だと説いているのです。⁽²⁶⁾

b) 慈円(1155・1225年)

慈円は僧であり、歴史家です。また、この時代を代表する歌人のひとりです。このことは当時の詩的傾向の脈動を伝える歌集「新古今集」に、慈円の和歌92首が、西行に次いで2番目に多く収録されている事実で裏づけられるでしょう。

もちろん、慈円も法華経についての和歌を詠んでいます。慈円が法華経を根本經典とする天台宗の僧であったことも関係しているかもしれませんが、慈円の歌集「拾玉集」⁽²⁷⁾には、法華経の各品についての和歌が収められています(第4巻)。また、慈円には法華経の各章の100の経文をもとに詠んだ歌を収めた「法華要文百首」もあります。

慈円の釈教歌で最初に気がつくことは、慈円が法華経を悟りと救済のための卓絶した經典であると理解していたということです。

○法師品に関する和歌

「法華は最も第一なり」⁽²⁸⁾

春の山秋の野原を詠めすて庭に蓮の花を見る
かな

この和歌の意味ははっきりしています。つまり、たとえ春の山が花で埋めつくされようが、秋の野原が紅葉で彩られようが、そういう景色を見ることはやめたということであり、この山野とは、さまざまな小乗の教えを表しています。つまり、自分が育った天台宗の庭に咲く蓮華の花（法華経）を見るにまさるものはないというのです。法華経の卓越性についての慈円の見解は、他の和歌にも見ることができます。

○方便品に関する和歌

「諸法の実相」⁽²⁹⁾

津の国の難波のことも誠とは便りの門の道よりぞ
知る

この和歌は、難波の風景は季節ごとに移り替わりはするが、私たちはその本然の姿を知っているという内容です。つまり、法華経の入口である方便品の（諸法実相の）教えを通して、私たちはすべてのこと（諸法）の真実の姿（実相）を知ることができるということです。慈円は、法華経が一切の真実を解き明かす鍵であるということを確信していたのです。

釈教歌人としての慈円のふたつ目の特徴は、彼が、当時または過去の歌人の有名な発想や言い回しを、巧みに利用する才能があることです。慈円の時代では、他人の作品の外形的要素を真似しても、盗作とかオリジナリティーの欠如とは見なされなかつたことに留意しなければなりません。非難されるどころか、伝統に對して敬意と繊細な感性をもっていると思われたのです。こうした作歌法は、個人主義の伝統のある我々の西洋文化ではあまり感心されるやり方ではありませんが――。

次のふたつの歌は、慈円と同時代の歌人によって詠まれたもので、慈円の先の和歌と同じイメージが使わ

れています。初めは西行による和歌です。

津の国の難波の春は夢なれや蘆あしの枯葉に風わたる
なり（新古今625）

西行の和歌は、能因法師による次の和歌を踏まえて作られています。この歌を収めているのは、新古今和歌集より百年以上前に編纂された「後拾遺集」です（85頁の表を参照）。

心あらむ人にみせばや津の国の難波あたりの春の
景色を（後拾遺43）

このふたつの和歌のイメージ、とくに春のモチーフと難波と津を引くことによって、慈円は名誉ある和歌の伝統の流れの中に自身の釈教歌を置きました。しかしながら、慈円はその歌を法華経への称賛に捧げたのです。西行と能因が、春によって移り変わる心情をかみしめているのに対して、天台の高僧である慈円は、

このように移ろいゆくものの根底にあるのは、法華経の不変の真実であると訴えたのです。

C) 藤原俊成（1114・1204年）

藤原俊成は勅撰集「千載集」の撰者であり、有名な歌人・藤原定家の父です。俊成の私家集は「長秋詠ちやうしゅうえい藻」と呼ばれ、そこには法華経の二十八品を詠じた歌が順に収められています。

○菓草喻品に関する和歌

「彼此ひし 愛憎の心有ること無し(30)」

春雨はこのもかのも此面彼面の草も木もわかずみどりに染むる
なりけり(31)

春雨は、こちらでも、あちらでも、あらゆるところの草や木々の上に、わけへだてなく降り注いで、花や葉を茂らせ、緑に染めます。同じように、仏の慈悲も惜しみなくすべての人に注がれ、人々を育てます。この「三草二木の譬え」は、法華経の七譬のひとつで、

菓草喩品にあります。仏の慈悲が、春雨に譬えられています。雨は、あらゆる草や木に平等に降り注ぎ、それぞれの特徴に合わせて、生長と繁茂を促します。同様に、人々に平等に注がれる仏の教えは、すべての人に恩恵を与えますが、聴く側の違いによって、受けとめ方が異なってくるのです。

「六万九千三百八十四の妙なる水滴」

このマドリッドの春雨の中、こうして水の話で講演を終えられることは、喜ばしくも新鮮な偶然です。一体、水というものの以上に法華経の素晴らしい特長をうまく譬えられるものがあるでしょうか？

今日ここで、豊饒なる日本文学の庭の中から選ばれた多くの作品に生命を与えてきた法華経という「水」について語りましたが、その讃嘆すべき影響力を、皆さまが少しでも理解してくださったならば、うれしく思います。

水がさまざまな形に変化するようには、法華経は、あらゆるものに染み通り、触れるものすべてに命を与え

てきました。六万九千三百八十四（法華経に使われた漢字の数）の妙なる水滴から成る水晶のごとき水の流れは、かつての時代と同じように、現代に生きる男性を、そして女性を、蘇生させ続け、浄化し続けているのです。

水と大地——それこそが法華経と日本文化の関係なのです。

注

- (1) George Jiji Tanabe & Willa Jane Tanabe, *The Lotus Sutra in Japanese Culture*, University of Hawaii Press, 1989
- (2) 池田大作／根本誠『古典を語る』潮出版社、1974年。聖教新聞社刊『池田大作全集』第16巻所収。
- (3) Carlos Rubio, *El pájaro y la flor. Mil quinientos años de poesía clásica japonesa*, Alianza Editorial, 2011
- (4) 前注(1)所収の論文“Poetry and Meaning: Medieval Poets and the Lotus Sutra” by Yamada Shozen
- (5) 創価学会発行『妙法蓮華経並開結』（以下、『法華経』と表記）478頁
- (6) 「古事記」「日本書紀」に応神天皇の治世下、王仁が『論語』などとともに渡来したとあり、儒教は5世紀頃には伝来していたと考えられている。

(7) 岩波書店刊『日本古典文学大系』(以下、『大系』と表記)

第1巻『古事記 祝詞』121頁。なお本稿での『大系』からの引用は旧字体を新字体にしたものもある。

(8) 「若し人有つて是の薬王菩薩本物品を聞いて、能く随喜して善しと讃ぜば……身の毛孔の中より常に牛頭栴檀の香を出さん」。『法華経』601頁

(9) 『大系』第15巻230頁

(10) 『法華経』103頁

(11) 『大系』第18巻396頁

(12) 『大系』第15巻43213頁。「よいことを言おうとすればあくまで誇張してよいことづくめのことを書くし、また一方を引き立てるためには一方のことを極端に悪いことづくめに書く。全然架空のことではなくて、人間のだれにもある美点と欠点が盛られているものが小説であるが見ればよいのもしれない。……深さ浅さはあるだろうが、それを皆嘘であると断言することはできない。仏が正しい御心で説いてお置きになった経の中にも方便ということがあって、大悟しない人間はそれを見ると疑問が生じるだろうと思われる。方等経の中などにはことに方便が多く用いられています。結局は皆同じことになって、菩提心はよくて、煩惱は悪いということが言われてあるのです。つまり小説の中に善悪を書いてあるのがそれにあたるのですよ。だから好意的に言えば小説だって何だって皆結構なものだということになる」(與謝野晶子訳、角川文庫『全

訳 源氏物語』第3巻)

(13) 『大系』第19巻80頁

(14) 五千人が法座を去ったことを釈尊はとがめず「是の如き増上慢人は、退くも亦た佳し」(『法華経』119頁)と言ったことを踏まえている。

(15) 86頁の行基の和歌でも言及されている。

(16) 島根県雲南市の須我神社。歌は「八雲立つ 出雲八重垣 妻籠(こみ)に 八重垣つくる その八重垣を」。

(17) 『大系』第8巻93頁

(18) 「生死(いきしに)の二つの海を厭はしみ潮干(しほひ)の山をしの(徳)ひつるかも」(万葉15・3849)、「世間(よのなか)の繁き仮廬(かりほ)に住み住みて至らむ國のたづき知らずも」(万葉15・3850)。

ともに『大系』第7巻151頁。

(19) 河原寺(川原寺)は飛鳥の地にあり、飛鳥寺(法興寺)、薬師寺、大官大寺(大安寺)と並ぶ、飛鳥の四大寺に数えられた。このうち平城京への遷都とともに他寺は本拠地を平城京へ移したが、河原寺は飛鳥にとどまり、のち衰微した。中金堂の跡に、現在は弘福寺が建つ。

(20) 村上天皇の第10皇女。12歳で賀茂斎院になってから57年の長きにわたって斎院を務めた。多数の女房を集めた文学サロンを続け、後宮文学の繁栄の一翼を担った。

「拾遺和歌集」以後の勅撰集に37首入集している。

(21) 円融天皇の女御で一条天皇の生母。東三条院。

- (22) 春(上・下)、夏、秋(上・下)、冬、賀、別、羈旅、哀傷、恋(4巻)、雑(6巻)からなる。巻20(雑歌6)における「神祇」「釈教」の分類は勅撰集で初めてのものである。
- (23) 春(上・下)、夏、秋(上・下)、冬、離別、羈旅、哀傷、賀、恋(5巻)、雑(上・中・下)、釈教、神祇の部から成る。全20巻。
- (24) 『法華経』 355頁
- (25) 『法華経』 637頁
- (26) 「妙法蓮華とは、これすなわち觀自在王の密号なり」。
『法華経開題』は空海の法華経論。
- (27) 慈円の家集であるが、成立は鎌倉最末期から1346年頃とされる。尊円親王編。5巻(流布本は7巻)。仏教関係の法楽歌が多い。また、歌道論では「歌道即仏道」を説く。
- (28) 『法華経』 362頁
- (29) 『法華経』 108頁
- (30) 『法華経』 250頁
- (31) 『大系』第80巻336頁(長秋詠藻407)

(Carlos Rubio / マドリード・コンプルテンセ大学教授)